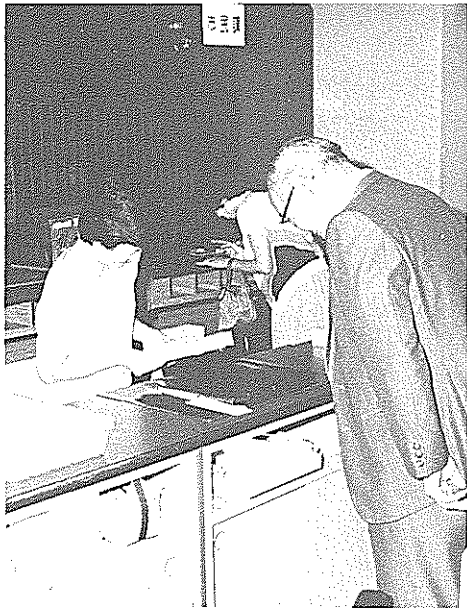


7月1日から

市民課窓口事務を 電算化

最初の交付者に記念品を贈呈



浜田助役が最初の交付者に記念品を贈った

七月一日から本庁の市民課窓口では、住民票の写しの交付、転入、転出、転入届などについて電算処理に変わりました。

市では、住民サービスの向上と事務の効率化を図るため、住民記録の電算化を進めてきましたが、その準備がこのほど完了。

この日から、例えば住民票の写しは、今までのコピー方式から皆さんの申請に応じたものをそのつど、電算で打ち出し交付するようになりました。また、支所管内の住民票に関する事務は本庁の窓口でも取り扱うことができるようになりました(ただし、戸籍事務、印鑑事務は今までどおり支所で取り扱います)。

この日は、新しい住民票の写しの交付第一号を記念して、稲生の主婦に浜田助役から記念品が贈られ、電算化を祝いました。

勇壮に

大護摩祈願祭

○十市石土神社○

お山にホラ貝が鳴り響き、十市石土神社の大祭が七月一日から十日まで開かれました。

石土神社は今から千二百年ほど昔からある由緒ある古社で、伊予の石鐘山の「本家」ともいわれています。

一日は、「お山開き」。午前九時、太鼓が打ち鳴らされ、信者約百人が見守る中、古式通りにまず神輿から三體のご神体を取り出し、修験行者らが背負って神社裏の石土山の「ご天上」へ。ホラ貝が鳴

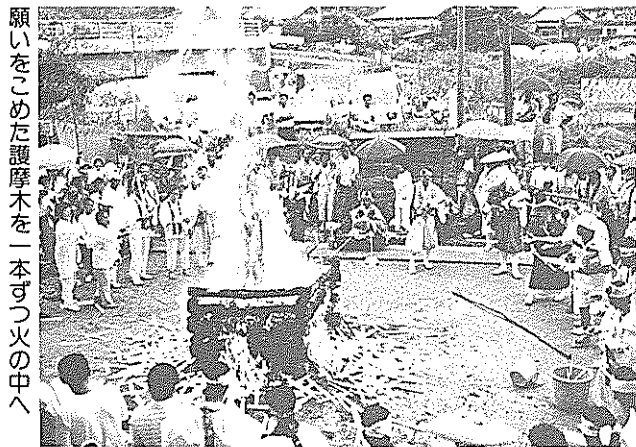


新しく生まれ変わる火渡りの儀

る中、高さ約十層ある岩場では鎖を伝い次々に登りました。「ご天上」には県下各地から来た信者が参拝。ご神体を体当てもらい、無病息災の加持を受けていました。六日はクライマックスを迎え、無病息災、家内安全などを願う大護摩祈願祭。午後一時、小雨にもかかわらず、県下各地から修験行

者や信者らが集まり最高のにぎわい。境内にホラ貝、鉦杖が響く中、儀式に備い清めの修法などを行い、護摩に火が入れられました。そして、信者らの願いが書かれた護摩木約一万本を修験行者がその願いを読み上げ、一本ずつ火の中に投げ込み、火祭りは最高潮。

最後は護摩の焼けた跡をほだしで歩く「火渡りの儀式」。これは火を渡ることで新しく生まれ変わるという意味があり、まず修験行者が気合とともに渡り、それに続いて一般の参拝者も次々に渡っていました。



願いをこめた護摩木を一本ずつ火の中へ